

4 シスター・ローザ

I

吊いの鐘が鳴る
死を告げる鐘の音が
山に木霊する
今 黒衣の修道士は
頭巾を目深に被り
部屋に独り座っている

5

II

死の冷たい手が
修道士の震える息を凍らせる
耳には恐ろしい歌が聞こえる
それは 天翔る亡霊どもが
一斉に通る過ぎる時
一日の終わりにあわせてうたう歌
容赦ない運命の女神が
ローザの肉を土くれへと腐朽る時を
亡霊どもはうたう

10
15

III

その時は過ぎた
それは 修道士の脳ずいの髄から永遠に
平安が去った瞬間だった
目からは熱い涙が静かに溢れ出た
抑えようにも抑えられなかった

20

IV

美しい金の十字架を床に投げつけた
吊いの鐘が耳に突き刺さる
「ローザには これからずっと
喜びがある
私にあるのは 破滅と戦慄と恐怖だけ」

25

V

弔いの鐘が鳴った時
目をぐるりと回し
恐ろしいほどの苦痛に荒れ狂い
地団駄を踏んだ
鐘の音が止むと
涙がまた溢れ出る

30

VI

凍てつく絶望の痛みで
激しい不安の鼓動は凝まり
ただ口もきけずに苦悶の中 座っていた
ついに 雲ひとつない夜空に星が瞬き
青白い月明かりが丘を照らした

35

VII

修道士は部屋で 跪いた
地獄の恐怖も
苦悩の痛みに比すれば喜び
修道士は神に祈った
永遠なる呪いを解きたまえ

40

VIII

跪き 一心に祈りを捧げた
ついに修道院の鐘が真夜中 1 時を打った
燃えたぎる血が その鐘で凍てついた
虚ろな声が 恐ろしい声が 耳もとに囁く
「お前の懺悔のときは終わった」

45

IX

夜の闇が濃くなり
輝く月の光が
山の頂で翳っていった
暗い山から声が
冷たく低い声がした
「修道士よ いつでも死ぬがいい」

50

X

修道士は立ちあがった
心臓は激しく鼓動し

四肢は恐怖で麻痺した 55
青ざめた額は
墓地の露で濡れ
死者と眠ることに震えた

XI

真夜中の大嵐が
大柄な修道士の周りを荒れ狂う中 60
礼拝堂の裏手の暗がりを探し求めた
踏まれた草が吹きすさぶ風にあわせて
ひゅうひゅうと揺れる中
修道士は真新しい墓を探し求めた

XII

暗く大きな亡霊どもが 65
修道士の周りを飛び
その叫び声は風の音と混じりあうようだった
真っ黒い壁に
ぼんやりと いくつもの影が浮かんだ
修道士は恐怖に慄きながら進んだ 70

XIII

嵐の悪鬼どもが
真新しい墓の上で暴れまわる
恐ろしい亡霊どもが ^{うごめ}蠢いている
修道士は神に救いを求め
恐怖のあまり ^{くずお}頽れた 75

XIV

絶望が腕に力を与え
呪いを追い散らそうと
ローザの棺を打ち破った
すると激しい嵐は
なお一層 凄まじく吹き荒れ 80
雷が轟き渡った

XV

悪鬼の群は喜びで声をたて
腐ちゆく亡霊どもと一緒に笑った

悪鬼どもが宙に舞うと 不気味な翼が
高く恐ろしい音をたてた 85

XVI

死んだ修道女の墓から骸骨が起き上がった
地獄の冷たい露を滴らせ
腐ちた眼球に青白い炎が宿り
墓に佇む黒衣の修道士を
勝ち誇ったように照らした 90

XVII

女の腐ちた手が修道士の震える頭をつかんだ
恐怖が力を与えた
「私はもう生きられぬ
死が私の悲痛な苦しみを終わらせるのだ
地獄が大きく口を開ける そこであなたと会おう」 95

XVIII

骸骨の肺が音をたてた
恐ろしく 寂しく 凄まじい音
長く長く地面が揺れた
容赦なくその音が漂うと
低い呻き声が地獄から応えた 100

(伊藤真紀訳)